温　故　知　新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介（55）　平成 14 年９月 15 日

古代の官撰史書（１）

『日本書紀』(213/48)

『日本書紀』は六国史の一つに数えられ、養老４（720）年舎人親王らによって著された日本最古の官撰史書です。当初は 30 巻と系図１巻がありましたが、系図１巻は散逸して伝わっていません。神代から持統天皇の治世までが漢文体で記されていますが、本来の書名には定説はなく日本紀と言う場合もあります。複数の執筆者が想定されていますが、舎人親王以外はわかっていません。完成までに数十年かかり、その体裁は中国の史書にならっており、和銅５（712）年に完成した『古事記』(213/52)とともに「記紀」とも言われています。朝廷では最初の正史として尊重され、完成してから平安前期までに７回も講書が催されたことが記録に残っています。

日本書紀には古くから様々な写本や版本がありますが、当館は寛文９（1669）年に著された京都の武村市兵衛による版本などを所蔵しています。この版本は全 15 冊であり、その中に『日本書紀』全 30 巻が納められています。寛文９年版は、先行の版本である慶長15（1610）年版に、返り点、句読点が加えられています。また、寛文９年版は『新訂増補国史大系』に納められている『日本書紀』の底本になっています。

『日本書紀』全 30 巻は、表記や語法の微妙な相違により１０分類できると言われ、執筆者もそのくらいの人数がいたのかもしれません。

巻１と巻２は「神代　上・神代　下」の題名があり、文字どおり「神代七代」、「四神出生」などの神々の説話が記されており、皇室の由来を体系化するためのものです。巻３以降は編年体で、一つの巻に一代、または数代の天皇の治世ごとに記されています。巻３は伝説上の初代天皇である「神日本磐余彦天皇（神武天皇）」について記されています。

天武紀と持統紀である巻 28～30 は、ほぼ史実どおりであるとされますが、巻がさかのぼるほど、記録と説話が混在しています。巻 28 は天武天皇成立の根拠となった壬申の乱中心の記載であり、巻 29 は天武天皇の治世となっています。最終の巻 30 は「高天原廣野姫天皇（持統天皇）」と題名があり、持統天皇の出生や天武天皇を助けて功績が大きかったことなどが年月ごとに記されています。

注釈書も古くから書かれており、鎌倉時代の『釈日本紀』、江戸時代の『日本書紀通証』、『書紀集解』(213/53)などがあります。科学的研究は大正年間の津田左右吉による記紀の研究から始まっています。津田は記紀における神代および初期の記述は史実ではなく、思想としてとらえること、各部分に造作が多く見られることなどを緻密な文献批判を通して論述しています。

【参考文献】

『新訂増補国史大系』
（210.088/4A-3）

『国史大辞典』
（210.03/41）